矢野文雄『周遊雑記』における自由主義思想

明治期啓蒙知識人の世界史像と「宗教」

山口亜紀
YAMAGUCHI Aki

はじめに

維新前後から明治20年代頃は、同時代の欧米諸国の書物が次々と翻訳され始め、広く西洋の事情を記したいわば西洋世界への入門書が世に送られて歓迎された時期であった。特に英国の思想・文化の日本への影響はもはやたやせぬまでに根をおろしつつあった。近代出版の出発点ともなった福沢諭吉の『西洋事情』（慶応2－明治3年）や『文明論之概略』（明治8年）、中村敬宇によるS. スマイルズのSelf Help, 1859の翻訳『西国立志編』（明治4年）、ミルのOn Liberty, 1859の翻訳『自由之理』（明治5年）の大きな影響はあらためてふれるまでもないであろう。さらに明治10年代の「大新聞時代」には、海外通信も現われ、英国やヨーロッパの政治経済から文学教育、道徳宗教、民情風俗まで、西洋社会とその文明の実情が生き生きと伝えられている。その中でひときわ優れた海外報道の一つとしてあげられるのが、矢野文雄の「周遊雑記」である。

矢野文雄は明治13年の交詢社「私擬憲法」の起草に関わった一人として、また明治10年代後半の自由民権運動の画期をなす立憲改進党結成に参画した一人として知られている。他方、明治16年に著した政治小説「斉武名士経国美談」が大反響をもたらし文学者としても注目を集めた。けれども、矢野の才能が遺憾なく発揮されたのはジャーナリストとしての試みであると評する者もいる[1]。矢野は福沢諭吉の慶応義塾を卒業後、明治9年、26歳にして郵便報知新聞に社説「政略篇」を書いてその副主筆になってから、70歳をこえる晩年に「大阪毎日」の副社長として経営・執筆の両面で活躍するまで在野のジャーナリストとしての歩みをとどめることはなかった。

中でも、矢野の「周遊雑記」――国会開

設を前に西洋諸国の諸制度を調査するために外遊した先のロンドンから「報知社」に送って帰朝前の1886年（明治19）6月に刊行された海外通信――は、同時代の西欧から日本に打ち寄せつつあった思想・文化を示すものであると同時に、日本の実情と比較対照して日本の将来の方向を論定しようとする当時の啓蒙知識人の世界認識や「文明論」を考える有力な資料ということが出来るだろう。丸山真男は、矢野の海外通信を読んで次のように述べている。

> 政治記事は申すに及ばず、経済・教育・日常風俗・文学・美術・宗教から文字通りの街頭の見聞にいたるまで、その関心の広汎さ、その洞察の深さ、その目配りの緻密さに、改めて驚歎の声を発せずにはおられなかった。もちろんそのなかには明確な事実認識の誤りもあるし、その価値判断が、大にしては明治十年代という時代の、小にしては龍渓個人の、歴史的制約を脱し得ないものも認められる。けれども全体としてみれば、この通信はたんなる当時の海外報道の範囲をはるかにこえて、それ自体、一個のヨーロッパ文明論を形成しており、まさにこうした性格を帯びた情報として、その資料価値の高さには目をみはらせるものがある[2]。

また注目すべきこととして、1886年（明治19）10月『郵便報知新聞』に掲載された「周遊雑記　下」〈宗教道徳の部〉では、「理科」（自然科学）と「智力」（社会科学・諸制度）の発達に抵触しない「宗教」として、ユニテリアンが日本にはじめて紹介されてもいる。その中で、矢野はユニテリアンを高く評価し、ついにはこれを「国教」にすることを説いている。その翌年には、同紙社説欄に「ユニテリアン教の要領」を連載し、同年のユニテリアン宣教師 A. M. Knapp の来日、1889年（明治22）の日本ユニテリアン協会の発足と続いた。

同時代の英国から日本に打ち寄せた思想の流れの中心をなしたのは、19世紀初めからの自由主義・急進主義であったが、その一方で英国は帝国主義というもう一つの顔をもっており、両者は分かちがたく結びついていた。この両面をどのように解するのか。また世界の諸国民の野蛮から文明への進歩というこの時代の英国にゆきわたった世界史像をどのように受け止めるのか[3]。このような世界像、歴史観において日本をどこに位置づけるのか。こうした問題は啓蒙や自由民権運動から平民主義にかけての思潮がある種の揺らぎと脆さを孕む一因になった。

小論は、維新前後の旧体制の崩壊の時期から近代国民国家としての日本の確立期に指導的政治家としても在野のジャーナリストとしても活躍した、矢野文雄の海外通信『周遊雑記』を通じて、上で述べた大きな問題の一端をとらえようとする試みである。

啓蒙的知識人における近代国家像

維新以来、啓蒙的知識人たちは近代国家の確立をめざして、国家や社会の諸制度、機関、学術など諸方面で腐心したが、また他方、一国における社会の「精神発達」のありかたを自らの本質的課題として議論を繰り広げた。例えば、福沢諭吉における文明論は、「天下衆人の精神発達を一体に集めて、其一体の発達を論ずるもの[4]」であって、「衆人の精神発達」の担い手である個々人の精神の発達を説いたのであり、個々の精神発達というよりもむしろ個々人を集約した社会としての「精神発達」に重点をおいて議論がなされた。明六社を中心とする啓蒙知識人にとって、その「精神発達」は政治的権力による先導によって達成されるので

はなく、政府や政党結社の政治活動に対する民間知識人の自由な知的活動によってはじめて推進されると考えられていたのである。

福沢の門下生であった矢野文雄もこのような理想を受け継ぎながら、専制政治を廃して民権の確立を唱えていた。その一方で、西洋文明への視野を広げつつ独自の近代国家像を形成していった。矢野の欧行の動機をうかがわせる文章はあまり多くないが、明治19年7月25日付の『郵便報知新聞』によれば、矢野は予定されている国会開設にそなえて、西洋諸国の立憲政治の実情を見、さらにその「民情風俗」、外交軍事、そして道徳宗教から文学教育まで西洋文明の現状をつぶさに観察して回り、日本の実情と比較対照して日本の将来の方向を論定しようと意図していた。そしてそれが『周遊雑記』の構想へと発展している[5]。

矢野文雄とユニテリアン

明治19年4月、ロンドン在住中に執筆した『周遊雑記』の上巻は、同年6月に報知社から刊行された。そして1886年（明治19）8月に英国から帰国後、ひきつづき『郵便報知新聞』の一面に「周遊雑記　下」〈宗教道徳の部〉を掲載し、西欧諸国（主にイギリスであるが）の道徳および宗教に関する論説を発表している。（その中で矢野は、この外遊で制度の他に国民の「民情風俗」、道徳、宗教の重要性に気づいたと述べている。）この「周遊雑記」下巻の構想（西洋諸国の諸制度文物、民情風俗、道徳、宗教、文学、教育を包括的に研究するという構想）は、結局実現しなかったが、「宗教編」は、『郵便報知新聞』明治19年9月21日から10月9日まで13回にわたって連載されたのであった。ユニテリアニズムを紹介し、さらにユニテリアンを日本の国教にする提案がなされたのも、この「周遊雑記　下」の〈宗教道徳の部〉においてである。

ユニテリアンは（正統派キリスト教の教義の中心である）三位一体論に反対して神の単一性を主張し、イエス・キリストの神性を否定する。また、歴史的に確立した権威をもっている個々の「教派」を超えた「運動」（超教派的キリスト教運動）であると表明し、理性と良心を最も重んじ、現世の利益を追求することを主張している。1887年（明治20）に来日した米国ユニテリアン宣教師 Arthur May Knapp は、教派的宗教（特定の宗派の次元）、および（特定の伝統に固執した）道徳を超えた、一運動であると宣言している[6]。またこうした立場から、来日の目的が諸宗教の比較研究による相互理解にあることを強調している。それとともに根本教義をさらに発展させて、ユニテリアンは、日本固有の特性を改革するのではなく、科学的な知の発達によって、日本独自の進化を促すことを主張したのである。

ユニテリアン協会の日本への宣教は、1887年（明治20）はじめに、矢野文雄が英国ユニテリアン協会に対して日本へ宣教師を派遣してほしいと要請したことが契機となった。当時矢野は英国の法律、議会制度、政党、選挙そして新聞事業などの調査のために、1884年4月から1886年8月まで約2年間にわたる英国での生活を終え、『報知新聞』を正確な報道と啓蒙的な記事を掲載するという、いわゆる「報知改革」にとりかかっていた。

矢野の要請に対し、英国ユニテリアン協会は経済的な問題を理由に、応じられないという結論を出したが、米国ユニテリアン協会に日本視察の宣教師を送り出すよう、協力を求めることを決定した[7]。これを受け

て1887年11月に米国ユニテリアン宣教師A. M. Knappが来日した。Knappは、矢野をはじめ、福沢諭吉、中村正直ら明六社を中心とする啓蒙知識人の支持を得て、本格的に日本宣教に乗り出していくことになった[8]。

『周遊雑記』における「宗教」論

上述したように、矢野が英国からユニテリアン宣教師が来日することを期待し、さらにユニテリアニズムを日本の国教にするという構想を抱いていたのは、2年間にわたる英国社会の調査を終え、報知改革に着手していた時である。この時期は、国会開設が迫り、憲法制定、条約改正といった、近代日本の国民国家としての独立を左右する重要な政治的問題が重なっていたため、矢野の論説は当然（官民の立場を離れたジャーナリストという立場からの）政治論が多かった[9]。その中で、国民の道徳的基準の確立の必要性を主張する、宗教、道徳についての論説も多く発表しており、「国民」の涵養に強い関心を示していた。「西洋風俗記」の中で、矢野自身、「今日の日本人に就て西洋の事物に昧らき最も重もなる欠点を数ふれば政治法律抔学問道理にて求め得らるゝ所のものには在らずして、却て風儀習俗の細事に在るなり。而して其風儀習俗の細事は取りも直さず政治なり法律なりの由りて生ずる所の原素となるものなれば、苟も国の真との根を看んとするには細事と見ゆる風儀習俗こそ却て大切なる意味あるものなるなれ[10]」と述べているように、西洋諸国の政治の動向よりもむしろ、人々の生活、風俗の観察を重視していた。さらに、政治的自由の問題に関しても、直接には非政治的な民衆の一人一人の日常生活における自立の精神（道徳的・知的自由）を基礎としてとらえたところに矢野の「文明論」の特質がみられた。それは、西欧列強によるアジア諸民族の亡国の危機をいかにして脱するかという切実な問題意識から発しており、福沢の「一身独立して一国独立す」という主張と共鳴するものであった。

外遊から帰国して約一カ月後、1886年（明治19）9月21日から10月9日までの13回にわたって連載された『郵便報知新聞』の「周遊雑記　下」〈宗教道徳の部〉において、矢野が着手したのは「仏、儒、耶蘇、三教の性質」を比較した「宗教」論であった。彼が「宗教」論を掲載するに至った背景には、政府の欧化主義政策の波にのって、キリスト教系の学校が次々と設立され、また教会の礼拝に出席する人数が政府のキリスト教に対する好意的態度によって一気に増加したことがあげられる[11]。矢野は、キリスト教が日本において勢力を拡大させてきている以上、もはやその利害の判断をゆるがせにしておくべきではないとして、（キリスト教がはたして日本に利益があるか否か明らかにするため）まず仏教、儒教、キリスト教の三教の比較検討に着手する。

> 元来日本にては、中等以上の士君子は専ら徳教を信じて宗旨に頓着せざるの風習あるに加ふるに、同じ宗旨とは云ひながら、西洋の宗旨の体と東洋の仏教とは其実甚だ異なる場合あるがゆゑに、尚更に宗教の一事を軽視し、西洋宗教の利を十分に究むること能はず、又其害の甚だ恐るべきことをも思はず、日本には迚も宗教は深く伝播すること能はず、日本は到底宗旨の国となり難く、宗教の問題は之を度外に置て可なりと云ふが如き有様あるやに思はるゝなり。然れども、若し西洋の宗旨は東洋の如く手軽きものにあらず、又其仕組の行届きて利害共に大に一国の社会を動かすに足るものなりと知らば、之を今日に論定して何れにか国論を定むること必要なるは明白なり[12]。

このように、矢野は「宗教」がもたらす利害は一国の社会全体に及ぶものであって決して軽視すべきものではなく、日本においても「宗教の問題」について議論する必要があることを主張するのである。外遊先で西洋諸国の「宗教」事情を見聞した矢野が着目したのは、「宗教」が国民の涵養にいかに利するかという点であり、また社会全体の変革をもたらす力であった。そして、それと同時に彼に明らかとなったのは、日本が「宗教」の必要性を軽視し、これを取り締まること（「宗教」による「道徳世界の取締」）を怠ってきたことがいかに問題であるかということであった。

矢野が英国においてキリスト教を理解したのは、その教義や教会政治や典礼を通じてではなく、むしろ市民の日常にあらわれた ethos を通してであった。そこには当時の英国の自由主義的特質が生き生きととらえられていた。（この時期に矢野は、当時欧米の宗教意識に新しい局面をもたらしつつあった、ユニテリアンをはじめとする自由神学に接したと考えられる。しかし、矢野がユニテリアンとどのような形で出会ったのかについて詳細は現在のところ定かではない。）

9 月 23 日付の「周遊雑記　下」（表題「宗教の必要及び三教の長所短所」）では、「欧州にては百事皆な宗教を基本とするが故に何事も之に帰着せざるものは」ないとして、英国をその一例に挙げている。

> 今西洋諸国の中、英国を以て其例を示さんに、其子の始めて生るゝや、日ならずして父母は之を寺院に携へ茲に洗礼を行ひ、又之に耶蘇教名を授け、其成長するの間僧侶の手を仮り或は寺院に於て之に道徳を教へ、其災悪不幸の事あるに方りては其宗教の神に祈らしめ、又其成長して婚儀を行ふに当りては其寺院に於て儀式を執行ひ、又年老ひて死するに臨みては悉皆其宗教の儀式に従て之を処置し、弔祭万事皆な其奉ずる宗教の外に出ることなし。故に早く云へば死生、吉凶、道徳、祈祷、何事にあれ其宗教内に於て之を処置せざるものなし。此宗教を以て生れ、此宗教を以て人となり、此宗教を以て世に立ち、此宗教を以て死す[13]。

このように、英国ではその国民が誕生から死にいたるまで一貫して「宗教」（キリスト教）の儀礼に従っており、その宗教の内に常に糾合され教化されていることを示して、「宗教」による「道徳世界の取締」が社会の結束の維持にとっていかに重要であるかを強調している。また特にキリスト教は社会の進歩に合わせて改良がなされ、プロテスタント（「新教」）においては儀式の簡易化が進み、道徳にわずかな教義を加えただけの教派も現れているので、「上流の士君子」（知識層）の同意も得られやすいと述べている。つまり、西欧諸国においてキリスト教が、道徳世界の目付けあるいは手引きとして十分機能しているのは（その役割を担うことができるのも）、自らを改良してきたからであると分析しているのである。他方、日本の実状を省みれば、封建社会が崩れ、道徳社会を形づくってきた「儒者」も力を失い、もはや日本の道徳世界には目付け役も維持者もない。そのために道徳世界は依拠すべき一定の根拠をもたない。それゆえに矢野は、9 月 26 日付の記事（表題「宗教改良の次第、道徳世界の取締」）の中で、今度は日本の道徳世界の欠点に言及し、それを宗教の改良が遅々として進んでいないことに認めている。宗教、道徳の再構築がなければ、国民国家としての日本の社会の強固な結束は望めないと訴えるのである。

世間の進歩に連れて著るしく改良せるもの

は欧西の耶蘇教にて、東洋の仏教は之に亜ぐものといふべし。三教の中にて最も改良なきものは蓋し儒教なるかな。若し日本にて仏教が未来の世界にのみ割拠せず現世道徳の世界をも支配し居たりしならば、此世界にも幾分の改良を生じたるやも知るべからず。唯此世界を欠きしが為めに其進歩を独り未来後世の世界に限りたるは、東洋に取ては惜むべきことにこそ。…中略…今日は学術世界は勿論、社会の仕組も年一年より非常に進歩改良することなれば、道徳及び未来の世界なる宗教は唯之と矛盾せざれば宜き者なり。然れども動もすれば相抵触すること多きを苦しむ色あり。蓋し今日の社会に大切なる学術と智恵の仕組とにさへ矛盾せずして、一方に於て世の風教を維持する役目を勉むる時は、最早や宗教は申分なきものと知るべし。流石に進歩の社会に立ち居るが故に、欧州の宗派は潜り潜りて此矛盾を右に避け左に免れ居るもの多し。…中略…今ま若し欧州進歩の社会を日本に遷し、欧州に行はるゝ所の学術と其智恵の仕組とを取て直に之を日本に用ひんと欲せば、今日の仏教儒教は必ず之と相矛盾して両立すること能はざるの場合多きことあるを免れざるに、耶蘇教なれば其儘之に適合するの利益あり[14]。

ここでも矢野は理知を重んじる啓蒙主義的立場から、「宗教」が直面する課題は、自然科学や社会科学などの発達といかに調和してゆくかということであるとして、この課題を克服してこそ「宗教」に社会的・政治的効用が期待できると強調している。こうして矢野の宗教論はまず、三教の比較から、日本の「宗教」、道徳世界の改良を求める主張へ、そしてその改良のためにキリスト教を日本の道徳世界の手引きとして採用する提案へと展開している。後半ではいよいよ問題の核心である、如何なる「宗教」を日本の国教として撰ぶべきかが問われる。

道徳世界の再構築をめざして

（福沢諭吉や中村正直ら当時の啓蒙知識人と同様に）矢野において、「宗教」は人類の頽廃状態から（蛮民・蛮国とみなされる状態から）日本の人民（日本）を区別する一つの身分 status を保証するものととらえられている。しかも、この身分の保持はなんらかの呪術的あるいは儀礼的な手段でもなく、また個々人の中に罪を認め懺悔することによる「罪の赦し」でもなく、「理科、智力の二世界」の進歩に撞着せしめることのない合理的生活態度によってのみ保証され得るとしている。このような理解にもとづいて、「周遊雑記 下」では、「理科、智力の二世界」の進歩に撞着せしめることのない合理的生活を促す「宗教」としてユニテリアンが紹介され、このような一派を以て国教と定めることが急務であると提案されたのであった。その理由としてユニテリアンが聖書から奇跡を除き、イエス・キリストを神の子としてではなく偉大な聖人とみるなど、理と智の世界に抵触せず、進化論的に最も進んだ宗教であることが挙げられている。

同派（注…ユニテリアン）は道徳に関する教義に於ては一切耶蘇の徳教を基本とし、又上帝上に在て万物を支配することを信ずるものなり。然れども唯其耶蘇旧教新教と異る所は両約全書経典中の神怪不稽なる部分を信ぜず、耶蘇をば唯大聖至聖の人と見做し、天と同体物にあらずと為すに在り。…中略…又此世界の万物に一定の規則あるは皆是れ天の司る所なれば天を畏れざる可らず、天を信じ道を慎むの外には別に神怪迷惑の教式を要せずとは是れ「ユニテリアン」派の眼目と為す所なり。

「ユニテリアン」派は斯く諸教派中に於て最も神怪惑迷の事を削除するが故に、理科世界の人と雖も亦た之と抵触するの憂なく、智力世界の人と雖も亦た之に矛盾するの恐れなし[15]。

矢野がキリスト教の中でも、特にユニテリアンに注目し、日本の「宗教」に採用すべきであると提案したのは、明治19年から20年にかけての欧化主義の波にのって、勢力を拡大しつつあるキリスト教会に対して、近代日本の道徳世界の再構築に手引き役として利するものであると期待しながら、その一方で一歩まちがえば日本の社会全体を大きく揺さぶりかねない脅威として危惧していたからでもある。10月8日付「周遊雑記　下」「西洋の諸教派は多年ならずして全国に蔓延するの勢あり」の中で、矢野は、すでに日本で布教活動を行っているキリスト教の「神怪惑迷の教派」の蔓延を阻止することが急務であることを切々と説いている。

多数人民の中には其智力の発達遅緩にして神怪惑迷の教派を妄信する者必ず夥しきことに相違なし。然るに若し此多数の人民が妄信惑溺の余り随意に僧侶の手に支配せられて、理科智力の世界と暗に相ひ抗すること恰も七八百年前に於ける欧州中世の有様の如く、一も寺院二にも僧侶、何事にあれ多数の人民を動かすには僧侶の手を仮らずしては為し難き迄に至りなば、其時に於て世界の面倒に陥ること実に意外なるべし。総て斯の如く、何事を為すにも僧侶の為めに多数の人民を引廻はされ、之に媚びざれば世事を動かし得ざる程の有様と変ぜしめなば、是れ則ち我邦を七八百年前の欧州の有様に却歩せしむるものにて、其患たる固より多言を竢たざるべし。今日に於て我国有識の士君子中に道徳宗教を以て当世無上の急務と見做し、此事に関して速に方向を定め置かんことを望むは則ち之が為のみ。西洋の諸宗派は日本旧来の宗旨の如く薄弱無力なる者にはあらざるぞ[16]。

このような文脈の中で再びユニテリアンを取り上げ、理智の世界に撞着しないキリスト教を撰用すべきであると結論づけている。ユニテリアンを日本の国教にせよという提案は、外国人宣教師の教派教会から干渉を受けていた当時の日本のキリスト教会に対する危惧にも後押しされていたといえよう[17]。2年におよぶ欧州への外遊を通して、矢野の目には西欧諸国の政治世界が教会寺院の僧侶のために干渉されその障碍を蒙るという事態に陥っていると映った[18]。従来のように「宗教」を軽視し、西洋から入ってくるキリスト教諸派の取締を不徹底にしたままでは、今度は日本の政治世界が撹乱される恐れがある。このような危機意識から、キリスト教諸派の勢力の増大に対して、より教義色が薄く、（英国のキリスト教のように）道徳世界の目付け役、手引きとしての効能が期待できる、ユニテリアンのようなキリスト教を（他の教派が勢力を拡大する前に）あらかじめ撰用するのが得策ではないかと提案したのである[19]。

矢野が『郵便報知新聞』でこのような提案を掲げた背景にはもう一つ、複雑な展開をみせた近代以降の道徳教育の歴史があげられる。明治5年（1872）の「学制」公布をもって一教科として規定された「修身」は、総じて欧米書の翻訳・抄訳を教科書として用いることによって、キリスト教的世界を基底とした、近代市民社会の自由・平等思想を謳った道徳論を説き、従来の道徳教育の伝統である儒教主義との断絶を促すものとなっていた[20]。しかし、自由民権運動が農民層をもまきこんで全国的な反政府運動

に発展し、政府転覆も可能な政治状況にまでなると、文部省は道徳教育の方針を啓蒙主義から儒教主義に再び転換させている。

矢野は『郵便報知新聞』の中で、このようにめまぐるしい変転を経て成立した道徳教育を、儒教や西欧の翻訳書、哲学、キリスト教など種々様々の切れはしを集めて継ぎはぎした「ボロ道徳」と評している。そして、このような道徳教育の不備、全国民が遵守すべき「道徳の標準」が一定していないことが国力の衰退の原因となると主張している[21]。

それ以前、1884年から1886年まで主にイギリスに遊学していた矢野は、貧富・階級の差別なく（「上は王公貴人より下は職工貧民の社会に至る迄」）イギリスの各家庭に「経典」が所持されていることに注目している。それが「道徳の本尊」として社会の結束に大きな役割を果していると捉えた矢野は、日本にイギリスの「経典」のような全国民に共通の道徳の標準にあたるものがないことが、国民の結束の弛緩の原因であると考えたのである。このような認識にもとづいて、矢野は「道徳の標準」を全国民を通して一定にすること、道徳を以て一国社会の結束を厳重にすることこそ、近代国民国家として日本が独立するための急務であると論じている。このように道徳上の一致を唱える中で、矢野はユニテリアニズムを近代日本の国教にすることを提案したのである。

人民の智徳の進歩と「自由討究」の提唱

この矢野の構想は、明治20年の倫理教科書草案によって示された、儒教主義に則り国家に重点をおいた文部省の徳育構想（国民なき国家像）に異議をとなえるかたちとなった。文部省が有識者に草案を送付し意見を求めている時期に、矢野は再びユニテリアンを取り上げて、彼らの教義を詳細に解説する記事「ユニテリアンの教義」を『郵便報知新聞』（明治20年5月7・8・10日）に掲載している。そこでは、西欧近代社会に展開した啓蒙思想の気風、すなわち教会の権威、政治的権威の批判を推し進め、封建的圧制から民衆の解放を求めていくという気風を帯びたユニテリアン教義の特徴を明らかにしながら、個々の人間の理性への信頼、道徳的進歩の可能性を強調している。ユニテリアンの教義を梃子にして個々の人民の涵養に注意を促しそれを基本とする道徳教育の実現を求めていたともいえよう。

同じ頃（明治20年5月に）、福沢諭吉は、文部省より送付された倫理教科書草案に対して、否定的な意見を寄せた論評を当時文部大臣であった森有礼に送っている。（このときの論評は、1890年（明治23）3月18日付の『郵便報知新聞』に「読倫理教科書」と題して掲載された。）その福沢もまた、人民の智徳の進歩と「自由討究」を唱えるユニテリアンの教義を高く評価している。そして「博愛」という普遍的世界的人間観と「一個人一家族の関係」ひいては「一国家」の関係との調停をユニテリアニズムにおいて見ていたのである[22]。つまり、「宗教」の道徳的側面において、ユニテリアンがこのような個々人の自発的な協同関係を促すことを期待していたのではないかと考える。政府の国家主義的陣営が徹底的な一元化によって、特定の宗派（「宗教」）、政治、倫理を包括する、普遍的な「日本精神」なるものとしての国民道徳論へ傾いていったのに対して、多元化によって日本国民の精神的支柱を追求していたといえるだろう。

政府が大教宣布運動以来推進してきた宗教政策は、やがて忠君愛国をめざす教育政策と合流して教育勅語の発布となって現れ

たのであるが、この過程で、矢野文雄や福沢諭吉らは文部省の儒教主義の徳育方針に対し、個々の人民の道徳的覚醒、それによる封建的圧制からの民衆の解放を唱えていた[23]。

明治19年から明治20年にかけて集中的に書かれた、道徳、宗教に関する矢野の論説は、明治国家の権威主義的な〈「国民」不在の国家像〉に対する反発ともとれよう。しかしその一方で、福沢が1882年（明治15）の「帝室論」ですでに「人心の収攬の中心」に天皇を置き、天皇が「人情の世界を支配して徳義の風俗を維持」することを主張していたように、矢野においても、近代家族道徳を天皇制と癒着させる伏線が引かれていったのである[24]。矢野とユニテリアンとの親交はしばらく続いていたものの、矢野に当初の積極的な支持はしだいにみられなくなっていく。それとともに矢野の関心は国教（「宗教」による社会の統合）から家族道徳の発展形態としての国家道徳に移行し、さらに矢野はそれを天皇への忠の論拠として論じていくことになるのである。

おわりに

明治期の啓蒙的知識人は、社会的な精神の発達のあり方を認識する方法として西欧近代に由来する科学的認識方法（自然科学の原理、法則）を人間やその社会に応用して、近代国家としての日本の独立と国民の形成について独自の議論を展開した。人間社会を有機体とみなして社会の構造、機能をとらえ、その起源と発展を説く社会進化論がそれである。社会進化論は当時の法律学、政治学、社会学、哲学の形成に多大な影響を及ぼした。この認識方法を、いわゆる超越の次元を志向する人間的なことである「宗教」的側面についてまでも適用可能にするものとして、啓蒙的知識人たちに注目されたのが、ユニテリアンであった。

このユニテリアンを最も早い時期に日本に紹介した矢野文雄において、いわば無形なるもの（日常的倫理）は有形なるもの（「典章制度」）の基礎であるとされ、民族としての思想を独立させるためには、有形なるもののみでなく無形なるものによっても個々の国民を統合する必要があった。また、逆に個々の国民の独立があってこそ、はじめて成り立つものであった。このように、一身独立して一国独立し、一国独立して人類や世界文明に資するという、福沢を中心として展開した、明治初期の啓蒙思想を矢野も継承している。しかし、明治政府の権威主義的動向、政治権力の集中強化の下にあって、その方針を転じさせようとする試みは容易なことではなかった。そのため当時の啓蒙的知識人は、公権力に対する民間の知識人の果たすべき知的活動の重要性についての自覚をさまざまな形で訴えたのであった。

個性の尊重と多様性の重視にもとづいた「自由討究」の観念に基礎付けられているかぎりにおいて、（個々人の自由な意識とその交流という働きの中に求められるかぎりにおいて）ユニテリアンに共鳴した知識人および宗教者たちのナショナリズムは民族の独自性や排他性を強調する個別主義particularismの方向よりはむしろ普遍主義への展望につながるものをもっていた。しかし、啓蒙的知識人は、ユニテリアニズムの有するもう一つの側面、すなわち世界に対して従来のキリスト教を超えた諸宗教との協同一致を目指すという普遍主義的（Universalist）側面を高く評価しながらも、一国の社会の進歩を思い描き、そのうえで人民の「精神の集点」を帝室に向けている

のである。教育勅語に象徴される国民道徳至上主義の締め付けによって、知識人（そして彼らの意見に符合していった宗教者）の「国家主義」とユニテリアンによって提示された普遍的世界的人間観との距離は修復できないまでに広がっていったといえよう。

このように明治期啓蒙知識人の普遍主義は、その内実を見る限りにおいて、国家主義と表裏であったのであり、後の八紘一宇の観念とも通ずる日本を中心にした普遍 / 世界主義であったといえるだろう。彼らの思想に見られる振幅は、グローバル化と民族的アイデンティティーをめぐる懸念とに直面する現代の我々にとっても示唆を与える問題ではないだろうか。

注

1. 矢野文雄に関する先行研究には主に次のようなものがある。大分県立先哲史料館編『矢野龍渓資料集』大分県先哲叢書全８巻、松尾尊兊監修　野田秋生著　大分先哲叢書『矢野龍渓』、蔦木能雄「明治期社会主義の一考察――矢野文雄と「新社会」――」『三田学会雑誌』No.86、表世晩「明治 20 年代の「南進論」を越えて」『国文論叢』第 30 号等。矢野とユニテリアンとの関係については、白井尭子『福沢諭吉と宣教師たち』（未来社　1999 年）および土屋博政「アーサー･ナップと日本ユニテリアン・ミッションの始まり」『慶應義塾大学日吉紀要　英語英米文学』No.35（1999）においてもふれられている。

2. 丸山真男「序文」『矢野龍渓資料集』第 1 巻、大分県立先哲資料館、1996 年、7-8 頁。

3. 近代日本においては主として「西洋文明」を標準として、「野蛮」から「文明」へと進歩していく世界史像が肯定されていたが、矢野はヨーロッパ視察の中でそうした標準そのものが西洋では固定したものと受け止められておらず、むしろ「西洋にて文明と云へる普通の意味には、唯「事物の便利と人情の軽薄」とを込め居るが如き事往々少からず、又新聞紙上の諸論説或は集会の演説抔にも文明と云へる者を固定の一物とし之を標準として事を論ずる」ことは稀であり、「野蛮人に対する事柄或は蕃族との関係事件に就て事を叙し理を論ずる時にのみ」シニカルに用いられているとみている。（矢野「周遊雑記」『矢野龍渓資料集』第 3 巻、358-359 頁。）

4. 福沢諭吉「緒言」『文明論之概略』岩波文庫、1995 年、9 頁。

5. 「〇周遊雑記　此書は一昨年の春を以て英京に赴ける弊社の矢野文雄が欧州諸国を漫遊し其制度文物より民情風俗に至るまで事々物々に付け目撃親覩の上周密なる考察を下し之を我が日本の実状と対照して彼我の優劣を論断し以て我が国の将来に履行すべき方向を指定せんの為めに著はせる者なり」（『郵便報知新聞』1886 年（明治 19）7 月 25 日）

6. Knapp は来日の目的について次のように述べている。 The errand of Unitarianism in Japan is based upon the now familiar idea of the ‘sympathy of religions.’ With the conviction that we are messengers of distinctive and valuable truths which have not here been emphasized, and that in return there is much in your faith and life which to our harm we have not emphasized, receive us not as theological propagandists but as messengers of the new gospel of human brotherhood in the religious life of mankind.” （*The Unitarian Movement in Japan: Sketches of the Lives and Religious Work of Ten Representative Japanese Unitarians*, 日本ゆにてりあん弘道会、 1900 年、 5 頁。）

7. 白井尭子『福沢諭吉と宣教師たち』未来社、1999 年、221–224 頁。

8. 日本ユニテリアン協会の機関誌『ゆにてりあん』創刊号（明治 23 年 3 月刊）では加藤弘之が祝辞を寄せ、福沢諭吉、中村正直、杉浦重剛も寄稿している。このことからも『ゆにてりあん』が主に明六社系の啓蒙思想家らに支持されていたことがわかる。また『ゆにてりあん』の寄稿者のなかには、仏教系の佐治実然、国粋主義を主張して雑誌『日本人』（明治 21 年 4 月刊）を発刊した志賀重昂や田岡嶺雲なども含まれていた。そして政治界から金子堅太郎、森有礼らがユニテリアン宣教師の来日を歓迎し、日本ユニテリアン協会の設立を支持していた。

9. 矢野が滞在していた当時の英国は、第二次グラッドストン内閣の時代で、選挙法の改正について活発な議論がなされていた。矢野はそうした自由な議論（「公争の仕組みと公議の働き」）が議会だけではなく、広く人民の集会においても見られることに着目し、これが「立国の大本」であると説いている。（『矢

野龍渓資料集』第 3 巻、341–342 頁。）

10.『矢野龍渓資料集』第 8 巻、203 頁。

11.1887 年にはプロテスタント諸教派の信徒数は、日本組合基督教会が 52 万 9315 人、日本基督一致教会が 68 万 8954 人、日本聖公会が 49 万 3060 人、メソジスト教会系が 83 万 5879 人、バプテスト教会系が 13 万 1153 人にまで増加している。（笠原一男編『日本宗教史年表』、1974 年、238 頁。）

12.『矢野龍渓資料集』第 3 巻、375 頁。

13. 同上、378 頁。

14. 同上、382 頁。

15. 同上、401 頁。

16. 同上、404 頁。

17. 1886 年（明治 19）3 月から、日本基督教一致教会や日本組合基督教会などが合同して、外国人宣教師の教派協会から独立する運動を展開していたが、その試みは翌年 4 月の合同中止決議により失敗に終わっている。

18. 矢野は「目下の急務は速かに国教を定むるに在り」（1886 年 10 月 9 日付『郵便報知新聞』「周遊雑記　下」）で、歴訪した欧州諸国にみられた寺院僧侶と執政者の争い、英国とアイルランドとの不和などについて述懐している。

19.「…宗教を他国の為に害用せらるれば、我国を侵略するの口実とせられ我国降服の端緒ともなることながら、又之を我国に利用する時は敵国を防ぐの役目をも務むるものなり。…中略…現に今日にありて伊太利の旧教に於ける、魯西亞の基督教に於ける、英国の新教に於けるが如き、則ち皆な其国を守るに於て常に幾分の助けをなし居るにあらざるはなし。然れば専ら政治上よりして考ふるも、我邦は「耶蘇ユニテリアン」派の如き一派を以て我国教と定め、此純良なる教門の為めに我身をも慎み我国をも守ると云へる迄に人民を導くことも亦政治家に取て一の方便なるべし。」（同上、「目下の急務は速かに国教を定むるに在り」）

20. 千葉昌弘「近代以降日本道徳教育史の研究」『高知大学教育学部研究報告第 1 部』第 55 号、1998 年参照。

21. 矢野、「弊風敗俗は亡国の大源」（1886 年 11 月 10 日から 30 日にわたって『郵便報知新聞』に掲載された。）

22. 福沢諭吉「ユニテリアン雑誌に寄す」『福沢諭吉全集』第 20 巻、岩波書店、1960 年、367-369 頁。

23. 当時の明治政府は、教部省政策を断念し、「国民教化」の方針を、「宗教」から「国民道徳」に基づいた国民教化へと変容しつつあった。伊藤博文は、枢密院での憲法審議が開始されるにあたって、欧米では、国家の根幹ともいうべき「機軸」が宗教に求められているのに対し、日本では宗教の勢力は微弱であり、そのために皇室に「機軸」を求めねばならないと宣言している。（伊藤博文による「起案ノ大綱」（枢密院における憲法審議開会の辞）「我国ニ在テハ宗教ナル者其力微弱ニシテ一モ国家ノ機軸タルヘキモノナシ…我国ニ存テ機軸トスヘキハ独リ皇室アルノミ」（明治 21 年 6 月 18 日））すなわち皇室（皇道）を機軸とする国民道徳があらかじめすべての時代的変化を吸収する歴史を超えた存在として、また外からキリスト教各派をはじめさまざまな「宗教」が入ってきても変化することのない民族の精神として構想されていく。そして、そのような流れは東京帝国大学文科大学哲学科教授の井上哲次郎が中心的役割を果たした国家道徳論の思想的運動へと展開していったのである。

24. 明治天皇の侍従を勤めていた宮内省時代には、皇室の今後の在り方、方針についての意見書を宮内大臣に提出している。その中で道徳の保護者としての役割を皇室に期待している。（「帝室学芸寮設置意見書」1892 年（明治 25）11 月、『矢野龍渓資料集』第 8 巻、113–114 頁。）

やまぐち・あき
本研究所研究員